

ボワギルベールの消費論

米 田 昇 平

序

1. 自然的秩序
 2. 大衆消費
- 結び

序

ボワギルベール (Pierre le Pesant de Boisguilbert, 1646–1714)⁽¹⁾ は経済世界における自律的秩序の存在を明らかにすることで、経済科学の礎を築いた。「自然だけが作りうる必然的秩序」([2], p. 874) に任せておけば、循環的、因果的な相互依存関係に導かれて、基本的に経済の調和的発展が可能である。ケネーより半世紀、スミスより80年も前にこのような可能性に着目したボワギルベールの卓越した洞察力は、高く評価されねばならない。筆者は前稿で、そのような彼の理論的展望の大筋を均衡概念の検討を通じて明らかにした⁽²⁾。またボワギルベール研究の新たな出発点を画したファッカレロ教授の近著でも、その次第は詳細に論及されている⁽³⁾。

教授は、ボワギルベールの理論的展望のなかでは、開明的な自己愛や強制的な政治的秩序はもはや必要とはされず、「ニコルやドマやあらゆるジャンセニスムの伝統は一挙に乗り越えられている」⁽⁴⁾として、一定の自律的秩序の認識に基づく彼の経済的自由主義に、自由主義経済学の誕生をみい

だした。しかし、もちろん彼の理論的展望は、そのような調和的均衡の概念あるいは経済の自然的秩序の観念にとどまるものではない。それは彼にとって、現実の反自然に立ち向かうときの理論的前提であるにすぎない。税制改革を唱える時論家として登場した彼の本領は、一方で、衰退や発展にかかわる動態論的な側面で発揮されているのである。このような動態論的な側面をもあわせてみることで、ボワギルベールの理論的展望をより立体的に再構成することができよう。

さまざまな反自然的な阻害要因を取り除くことで、どのようにして経済の均衡的な発展が可能となるか。経済学的に言えば、それは消費の一点にかかっている。現実の過少雇用（過少生産）の原因は何より過少消費にある。こうして消費主導による経済の発展の展望が示されていく。この阻害要因が除かれて自然的秩序が回復するダイナミックな拡大過程に、われわれは彼の自由主義の経済的帰結をみることができよう。また、そもそも経済の自然的秩序の観念のなかで、生産と消費の関係はどのように理解されているだろうか。やがて明らかにされるように、われわれはそこに生産と消費の一体化された販路説的なシステムをみいだすことができる。そこでは欲求充足の動機に牽引されて、歯車ががっちりとかみあって過不足の生じないシステムが自然的に形成されるであろう。

本稿の目的は、前稿の不足を補いつつ、消費論の視角からボワギルベールの理論的展望の全体像に迫ること、すなわちこの側面から彼の自然的秩序の観念の経済学的意味をより鮮明にし、かつ消費主導論に表れた彼の動態論的な展望を浮き彫りにすることである。それはフランス経済学の重要な特質のひとつをあぶりだすことにもなる。

(注) (1) 本稿では I. N. E. D. 版のテキストを使用した。I. N. E. D., *Pierre de Boisguilbert ou la naissance de l'économie politique*, 2vols, Paris, 1966. 引用した文献は次のとおり。文中では先頭の数字で表している。

[1] *Le Détail de la France*, 1695, pp. 581-662. [『フランス詳論』]

[2] *Traite de la nature, culture, commerce et intérêt des grains*, 1707,

pp. 827-878. [『穀物論』]

[3] Factum de la France, 1705, pp. 879-956. 『フランスの弁護』]

[4] Dissertation de la nature des richesses, de l'argent et des tributs, 1707, pp. 973-1012. [『富論』]

[5] Factum de la France, contre les demandeuses en délai pour l'exécution du projet traité dans le 《Détail de la France》, Manuscrit inédit, 1705, pp. 741-798.

(2) 米田昇平「ボワギルベールの均衡概念について」、田中敏弘編『古典経済学の生成と展開』, 日本経済評論社, 1990年。

(3) Gilbert Faccarello, *Aux origines de l'économie politique libérale: Pierre de Boisguilbert*, Paris, 1986. ボワギルベール研究の歴史と現状はこの著書で詳しく紹介されている。その後に見れた主な文献は次の通りである。まず経済思想史の通史の一環として扱われているものに, *Alain Samuelson, Les grands courants de la Pensée Economique*, Grenoble, 1988. *Claude Jessua, Histoire de la théorie économique*, Paris, 1991. *Jacques Wolff, Histoire de la pensée économique*, Paris, 1991. がある。18世紀の経済思想に関する特殊研究のなかでボワギルベールに触れたものとして, *Terence Hutchison, Before Adam Smith*, 1988. と *Simone Meyssonier, La Balance et l'Horloge, la genèse de la pensée libérale en France au XVIII^e siècle*, Paris, 1989. が現れた。ともに注目すべき研究書であるが, ボワギルベールに関してはファッカレロ氏の研究にほぼ全面的に依拠しており, とくに新しい視点が提出されているわけではない。さらに, “BOISGUILBERT PARMIS NOUS” と題して, 1975年5月22日から2日間にわたってルアンで行われた国際シンポジウムの報告論文集が I. N. E. D. より出版された。 *Boisguilbert parmi nous, Actes du Colloque International de Rouan, présentés par Jacqueline Hecht*, I. N. E. D., 1989. これには29本の報告論文が収録されている。

(4) Faccarello, *op. cit.*, p. 228.

1. 自然的秩序

ボワギルベールにとって, 文明化の過程を牽引する原動力は人間の欲求である。アダムの墮罪以後, 「未開状態」から「文明状態」にいたる過程

は人間の墮落が深化していく過程であるが、反面でそれは人間の欲求が次第に高い水準で充足されていく過程でもある。初期未開の時代には 3, 4 種類しかなかった必要品は、いまや「精神の墮落と洗練」によって 200 種類を越えるまでに増加した ([4], p. 976)。「大部分の職業が次々に必要とされるようになったのは、ただ快樂のためである」 ([4], p. 986)。彼にとってそのような「精神の墮落と洗練」あるいは「快樂 (の充足)」は、人間の本来的な性向である「豊かさへの願望」⁽¹⁾と一体のものである。彼は『富論』の冒頭で次のように述べている。「誰でも豊かになりたいと思うし、大部分の人が昼夜を問わず働くのは、もっぱら豊かになりたいがためである。…富は豊富にあってありすぎることはなく、どのような身分の人にとっても、どれほど所有しようと、またどれほど獲得しようと過ぎることのけっしてないものである。それ以外の利害に関心を抱くのは、まったくの空想であるかあるいは理屈とは無縁の宗教的反映である」 ([4], p. 973)。あるいはこうもいう。「売り手であれ買い手であれ、利益の願望だけがあらゆる取引の魂である」 ([4], p. 992)。

このようないわば無限の物的欲求に牽引されて、文明化の過程が進行していく。その物理的な前提条件は農業生産力の拡大による農産物余剰の増大である。「ヨーロッパの富の基本および原因は、小麦、ぶどう酒、塩、リンネルであり、…それらを必要以上にどれほど所有しているかに応じて、そのほかの物財を手に入れるにすぎない。…土地の果実の余剰が、弁護士、医者、役者、そしてどんなものであれ工芸に従事する零細な工匠たちに仕事を与えるのである。したがって不毛な地方ではこうした人々はほとんどみられないのに対して、そうでないところでは大勢みられることになる」 ([1], p. 583)。こうして農産物余剰の増大を契機に、無限の欲求を充足すべく新たな職業が次々に出現する。

これらの職業が相互に依存関係にあること、しかもそれはワルラス的な「すべてがすべてに依存する」といった形の抽象概念としての無時間的、関数的な相互依存関係ではなく、一定の方向性をもった因果的、循環的な

相互依存関係であることは、前稿で指摘した通りである。すなわち、農産物余剰の豊富の程度に応じて、欲求は比較的、必要度の低いあるいは奢侈性の高い財に向かい、これに応えるべく必要度の大きい職業から順に「富裕の連鎖」([2], p. 830) が形成されていくのである。その次第は次のとおりである。「購買力が高まるのに応じて支出が増大する場合に一定の順序があるのと同様に、必要以上のものをもととして人々はまず便益品を手に入れる。次には、洗練品 (le delicat), 余分品 (le superflu), 華美品 (le magnifique) へと移っていく。最後に、金持ちを破滅させるために、また生まれながらに何もたない人々を豊かにするために虚栄心が考へだした過度の品々をすべて手に入れる」([2], p. 838)。あるいは「余った必要品が便益品となり、便益品の余剰が洗練品に変わる。そしてこの洗練品の豊富が華美品を生みだし、華美品は多くの枝に分かれ、精神の活発さや心の墮落が考へうるかぎりの広がりをもよおさせる」([2], p. 841)。これらの言説からわれわれは、欲求が交換のための等価物を得て需要に転化し、これに刺激されて生産の種類と規模が拡大していく、という論理展開を読み込むことができよう。だが、そもそも自然的過程において、このような展開を可能にする農業生産力の拡大はいかにして実現されるのだろうか。あるいは交換のための等価物はどのような生産過程をたどってどのように増大していくのだろうか。彼は直接には何も語ってはいないけれど、われわれは次章の最後で、穀物価格の上昇を契機とする生産力の拡大過程の分析にそれなりの展望をみいだすことができよう。

ともあれ、職業と職業の相互依存体系が欲求充足の動機に促されて成立したように、これによって形成される交換社会⁽²⁾で行われる交換は、いわば欲求と欲求あるいは効用と効用の交換である。彼は個人的利益への配慮こそが交換関係を律する原理であり、社会的結合の原因であることを、スマスを思わせる語り口で次のように述べている。

「卸売りであれ小売りであれ、世の中のすべての商いは、農業でさえ

ももっぱら企業家の金銭欲によって操られている。企業家は奉仕を行おうとか、自分の商いを通じて契約を結ぶ人々に恩義を施そうとか考えたのではなかった。通行人にぶどう酒を売る居酒屋は、誰であれ通行人の役に立とうとしたのではけっしてなかったし、自分の蓄えが尽きはしないかと心配して旅の足をそこにとどめる通行人にしても事情は同じであった。世界の調和をもたらす国家を維持するのは、このような相互的効用なのである。各人は自己の個人的利益をできるだけ多く、そしてできるだけ容易に手に入れようとする」 ([5], p. 748-749)。

その後の18世紀の経済思想の展開を顧みるとき、以上のような彼の文明史認識、あるいは分業と交換の世界に対する彼の功利主義的認識がどれほどの先駆的意義をもちえているか、おのずと明らかであろう。われわれはここで、近代社会認識としての経済科学の成立の条件のひとつが整えられようとしているのを、まのあたりにしているのである。

自然的過程を経て形成されるこのような循環的、因果的相互依存体系あるいは「富裕の連鎖」を生産と消費の観点からみれば、この連鎖は生産と消費が一体となったシステムであり、販売＝購買の原則を維持する。

「確実に次のようにいえる。豊かな国では君主に対してであれ人民に対してであれ、一般的富裕は一般的かつ永続的な複合状態であり、そこでは、どちらにせよいつも同じ総量に対して持ち込んだり持ち去ったりしながら、各個人は片時も仕事をやめてはならない。どちらの側に減少が生じても危険は同じである。このことが厳格に順守されればその結果、すべてが揃った完全な構成が生まれる。なぜなら、人々はそこに何でも持ち込むからである。しかし誰かが自分の割り当てよりも多くを持ち去ったり、あるいは少なく持ち込んだりして、この正義のルールに違反しようとするれば、そのとき不信が生じて価格の釣り合いは乱れ、総量が損なわれることになる」 ([4], p. 1010)。

自然的過程において欲求が需要に転化して生産を刺激し、生産の種類と規模を決定するのであるから、攪乱要因が一切顕在化せず「正義のルール」に違反する者が出現しないかぎり、需要に応ずるために生産された生産物はかならず販路をみいだすであろう。ここに販売＝購買の原則、あるいは販路説的な展望をみることができよう。ただし、うへの引用文にみられるように、それは事後的にかならず実現される保証はなく、ファッカレロ氏のいうように⁽³⁾、いわば均衡の条件であるにすぎない。しかし逆にいえば、諸要素の連帯によって社会的均衡の実現された自然的秩序の世界においては、基本的に生産と消費の不一致はありえず、齒車はがっちりとかみあって過不足は生じないといえる。まさに「文明の進んだ豊かな王国のあらゆる職業は、時計の部品のようにお互いに支えあい、お互いに機能しあう」([4], p. 997) のである。

(注) (1) 彼にとって、「競争心」と「豊かさへの願望」こそが富裕の増大の原動力である。「[巧みさの点で隣人をしのごうとする]」このような競争心が、隣人を欺くことなく豊かになりたいという願望によって一般的となれば、あらゆる技芸は完成され、富裕はありうる最高のレベルに達する」([4], p. 985-986)。

(2) 文明化の進展は分業＝交換関係の拡大を意味する。「国家を成り立たせているあらゆる職業や工芸は、…ほかの職業や工芸に従事する人に生活資料を手に入れさせあるいは提供することによって、自分の生活資料を手に入れることを目的としている。したがって、それらはほかの職業や工芸に頼らざるをえず、相互にお互いの仕事を提供しあわなければならない」([2], p. 837)。このような社会的分業の体制が、農産物余剰の増大を前提に人々の欲求充足の動機に牽引されて進展していく。スミスのように、労働生産性の観点から富裕の増大＝生産力の拡大の原動力として認識されているわけではない。またあとでも述べるように、この社会的分業の体制は無政府的ではなく、条件さえ満たせば齒車はがっちりとかみあって進むはずのものである。

(3) Faccarello, *op. cit.*, p. 222.

しかしながら、引用文に示唆されているように、この生産と消費の一致

は常に危機にさらされている。「恐るべき精神の墮落のせいで、こうした調和の維持以外には自己の至福を期待できないというのに、誰もが朝から晩まで懸命になってこの調和を損なうためにあらゆる努力を払う。職人は誰でも、自分の商品をその価値の3倍以上で売りつけ、隣人の商品を、それを作るのに必要であった費用の3分の1で手に入れようとあらゆる精力を傾ける」([3], p. 891)。誰もが「自己の個人的利益をできるだけ多く、そしてできるだけ容易に手に入れようとする」にしても、なかでももっとも厄介なのが有閑階級の存在である。「何も作らずしかもあらゆる楽しみを享受する」([4], p. 979) かれらは、基本的に不労所得をひたすら奢侈的消費に用いる消費主体としての存在にとどまる。しかも自己愛に歯止めがないから、いつでも生産と消費の一致に対する攪乱要因となりうるのである。そこで、有閑階級の支出行動に焦点をあて、生産と消費の一致（あるいはその危機）を循環論の側面から検討してみよう。

ボワギルベールにとって、「文明状態」の出現とともに現れ、神の定めた労働のルールに反して不労所得を手にする有閑階級は、それ自体墮落した存在である（[4], p. 979）。しかし文明化の進展は有閑階級の欲求の広がりへと密接にかかわっていた。「だが墮落してからというもの、暴力と享楽趣味が介入して、人々は必需品に続いて華美品や余分品を欲するようになった。これにより、職業は増加して、最初はふたつであったのが次第に増えてフランスでは今日200以上もみられる」([3], p. 888)。「精神の墮落によって編みだされ日々洗練されているところの、感覚的嗜好を満たしうるあらゆるものを」([4], p. 985) 食欲に求めるかれらに先導されて、文明化が進むといつてよい。したがって、生産者大衆の生存は深くかれらにかかわっている。有閑階級の欲求を満たすための職業が、その維持存続を直接かれらの支出に依存していることはいうまでもない。また、かれらの不労所得は所得の「自然的循環」の起点また終点としてその中心的役割を担っている（[1], p. 584）。しかしながら、他の経済部門に対する農業の優位性が最初の時点で発揮されるにすぎず（農業以外の財が「無償で土地

の恩義を受けるのは最初だけである」[4], p. 830), その後はあらゆる部門間にけっして途切れてはならない循環的な依存関係が成立するのと同様に、かれらの土地所得も生産者大衆の勤労所得に規定されていた。これらの次第も前稿ですでに述べた。要するに、生産者大衆のあいだで相互依存関係あるいは「富裕の連鎖」が形成されたように、有閑階級と生産者大衆とのあいだにも相互依存関係が成立している。まさにあらゆる要素が連带的に国民経済を構成しているのである(一般的相互依存)。彼はいう。「余分品の労働者は彼に生活費を提供してくれた人のおかげで必要品を買い、それによって農業者の生産物の価格を支える。こうして価格が維持されてはじめて、農業者は自分の主人に支払うことができ、主人はこの労働者から買うことができるようになるのである」([4], p. 988)。結局、有閑階級は生産と消費を仲介する「仲介役であり、仲立ち人」([4], p. 989)であるにすぎなかった。

彼の議論を総合すると、有閑階級を仲介にする所得循環は、農業者と有閑階級、有閑階級と非農業者(都市の勤労大衆)、農業者と非農業者、そして非農業者と非農業者、これら四つの相互関係によって複合的に構成されている。有閑階級の土地所得からの支出がこの循環の起点であるから、穀物の低価格によって土地所得が減少すれば、次のような次第となる。

「支払われない土地所有者は…何も買うことができない。その影響は最初余分品のうえにふりかかる。その後も混乱が続けば、うえて述べた序列に応じて徐々に少しづつ人々は姿を消していく。それら余分品を生み出したのは富裕であり、富裕とはもともと土地の果実以外の何ものでもないから、その減少は余分品を道連れにするのである。…そしてこのような変化は余分品だけでなく便益品や有用品にさえ及び、そればかりか影響はただちに伝播してあらゆる職業に及ぶから、最初から、多くの身分や職業のかかわるもっと必要な財にまで襲いかかる。すなわち、苦境に陥るのが余分品や華美品だけであれば、混乱はそれほど嘆かわしい

ものとはならないであろうが、しかし余分品や華美品の労働者がその技術を用い職業を営むのはもっぱら必需品を手に入れるためであるから、一方が姿を消せばかならずやだちに他方も破滅してしまうのである」([2], p. 837-838)。

因果的、循環的相互依存関係を通じて、経済危機は累積的に深刻化していくのである。

さて、このような所得循環あるいは消費循環において、「仲介役」にすぎない有閑階級が不安定要因となりうるのは、奢侈的生活を好むかれらは貨幣愛ゆえに貨幣と商品との釣り合いを破壊し、また生活の余裕からいつでも支出を差し控える（貨幣の退蔵）ことができるからである。有閑階級の貨幣愛を彼は次のように述べる。「生活全般のなかで、自分の楽しみを満足させるだけの時間的余裕をどうにかもっている享乐的な者は、時期や季節に応じた通常価格で販売するために、穀物やそのほかの土地の果実を家や店にしまっておこうとは考えなかった。こうした配慮、こうした期待、こうした心配はその種の生活とは相いれるものではなかった。現金が半分しかまた4分の1しか手に入らなくても彼には十分であり、それによってひそかに、しかもより熱心に彼の快樂が満たされるのである」([4], p. 979)。その結果、「金銀とあらゆる物財とのあいだになければならない均衡が著しく攪乱されてしまう。…商業の奴隷たるものが商業の専制者と化してしまう」(*ibid.*)。かれらによる貨幣の退蔵も重大な結果をもたらす。「[貨幣が金持ちの手元にある場合には] 貪欲に駆られた無分別な精神の墮落によってであれ、あるいはより大規模な商いを期待してであれ、金庫に大量の貨幣が何カ月も何年も眠ったままに、したがって無用なままに放置されてしまう。ところで、このような退蔵から国王や国家はいかなる利益もひきだせない。それはお互いにその分を盗み合うことにすぎない」([4], p. 1006)。ボワギルベールにとって、価値保存機能をもちうる貨幣の退蔵はただちに消費購買力の喪失を意味する⁽⁴⁾。したがってこの退蔵

によって消費循環が攪乱されてしまうのである。もっとも、次章でみるように、有閑階級の貨幣愛は攪乱要因であり続けるとしても、貨幣の退蔵は基本的には不均衡の拡大要因にすぎない。かれらは不況時には貨幣の予備的需要を増やすことで衰退を加速しうが、好況時にはそのような行動を控えるものとされているからである。

彼は以上のような一般的相互依存あるいは消費循環の構想に立って、富者と貧者の連帯を説く。「神慮の欲するところ、フランスでは富者も貧民も生存のためにお互いに必要としあっている。…この両者の利益は不断の交流 (commerce) のうちにある」 ([2], p. 834)。あるいは、「富者のほとんど考え及ばないことだが、富者の富裕は何であれ貧民を維持することで作りだされるのであって、貧民が破滅すればかならずや国家全体に破滅が及ぶ」 ([4], p. 984)。ヴォーバンが描いたような当時の貧民の困窮を背景に⁽⁵⁾、この「人民の代弁者」 ([2], p. 871) は貧民を維持する必要性を力説する。しかし彼の構想の基本は富者と貧者の共存である。労働のルールに服さない有閑階級が存在は本来的には反自然的であるが、しかし彼にとって、文明化の自然的過程を経て形成された既存の秩序体系は、攪乱要因が現れず社会的均衡が維持されるかぎりには、それ自体自然的なものであり、神慮にかなっている⁽⁶⁾。こうして彼は既存の秩序体系の大枠を前提とし、諸階級の共存による一般的富裕を構想するのである。そして、そもそも両者は常に立場を交代する可能性を宿している。「超越的権力が目にみえない形で支配を及ぼす国家の調和は、経世家と浪費家の混ざり合いによって存続するものであるから、動産であれ不動産であれ、すべての事物は絶えざる変転を繰り返し、貧者が豊かになるために富者は貧しくなる」 ([1], p. 621)。したがって、既存の秩序体系の大枠を前提としながらも、旧慣墨守の姿勢ではない。諸階級の共存の世界は、実は社会的上昇と下降が繰り返されるダイナミックな世界なのである。

以上みてきたように、ボワギルベールの構想は大きな不安定要因を抱えているとはいえ、それが顕在化しないかぎりには生産と消費の一致はいわば

事前的に約束されており、無政府状態のもとでの経済均衡の構想とは質を異にしている。文明化の自然的過程とは、分業＝交換関係の歯車ががっちりとかみあって進むべき不可逆的過程なのである。この過程の進行さえ保証されれば一般的富裕の実現には十分であって、外国貿易や就労人口の増大を金科玉条の課題として掲げる必要はないといえる。経済水準の上昇にともなう交換＝流通手段の不足を恐れる必要もない。「富裕の時期」には貨幣の流通速度が高まるし、何より「紙券や信用が貨幣の20倍もの働きをする」([4], p. 999) からである。そもそも外国貿易は、あとでも述べるように、主に穀物の需給の調整弁としての役割が期待されているだけであり、貨幣を求めて、あるいは国内製造品の需要を国外に期待して外国貿易主導論を展開した当時のイギリス重商主義あるいはフランスのコルベルティスムとは根本的に異なっている。このことは、その後の18世紀フランス経済思想の展開を顧みるとき、先見性というよりも、むしろ彼の論理の観念性あるいは異質性を物語るものであろう⁽⁷⁾。

(注) (4) ボワギルベールにとって、貨幣の機能は本来、交換＝流通機能にとどまるべきものであるが、しかし経済の収縮が始まれば、「この以前はほとんどまったく無用であったものに非常に大きな役回りが突然訪れ、十分な価値が与えられるようになる」([4], 998)。このとき人々は先行きへの不安から競って貨幣を求め、もはや商業手形の類いは通用力を失うとされる。貨幣の価値保存機能が前提にされていることは明らかである。

(5) ヴォーバンの次の一節は有名である。「最近では、人民の約10分の1が乞食に身を落とし、実際に乞食をしている…。残りの10分の9のうち、10分の5の人々は乞食に施しをすることができない。なぜなら、かれら自身、こうした不幸な状況のもとでほとんど同じような状態にあるからである。残りの10分の4のうち10分の3の人々は暮らしぶりがかなりひどく、負債や訴訟ざたをかかえている。そして残りの10分の1、つまり帯剣貴族、法服貴族、聖職者と一般信徒、上層貴族、名門貴族、軍事および文民の官職保有者、裕福な商人、金利収入のある暮らしぶりの豊かな市民をすべて加えても、10万の家族を数えることはできない。そしてそのなかでも非常に裕福だといえるのは大小あわせて1万家族もない、といっても嘘をつくことにはならないと思われる」(Vauban,

Projet d'une Dime Royale, 1707, réédition par E. Coornaert, Paris, 1933, p. 7.)。

(6) 彼はいう。「不確かな将来のために現在の確かさを攪乱しうるような特別な動きを何もせずとも、そうなるであろう [陛下も人民もともに所得を増やすことができる]。何か特別なことをするのではなくて、ただ事物を自然の状態に戻すだけよいのである。事物はかつてそのような自然の状態にあったし、間接的利益 [権力に寄生する人々、主として徴税請負人たちの個人的利益] の引き起こすほとんど絶え間のない誤算が、良き意図しかもたない宰相閣下をいつもままとその気にさせて、事物をそうした自然の状態から引きだすことがなければ、事物はふたたびそこに復帰するであろう」 ([1], p. 582)。ここでいっているのは、要するにコルベール以前の状態に戻すことである。彼にとってそれもまた自然的状態なのである。彼の議論の論理的可能性が指し示す方向がどうであれ、少なくとも彼の自覚的な意図は、既存の秩序体系の大枠を維持しながら一般的富裕を目指すことであつた。彼は悪名高い徴税請負人の維持をも含めて、「現在の状況をいささかも乱すことなく」 ([1], p. 625) 改革の成就が可能であるとさえ述べている。

(7) 対外的な政治的緊張を背景に貿易戦争の様相を呈していた重商主義の時代に、このような外国貿易の相対的軽視がどれほど非現実的であるかは改めていうまでもなからう。その後の18世紀フランス経済思想は重農学派を例外として、強力なイギリス経済の側圧のもとで、生産力一般の拡充を課題とする後進国経済発展のための経済政策論に関心を集めていく。フランス経済思想は、ボワギルベールのケネーに対する先駆性のみによって、その先見性を言い立てるのでは済まない複雑な展開をたどるのである。

分業=交換関係の安定化の条件は、「世界の調和をもたらす国家を維持する…相互的効用」の実現である。効用と効用の交換において、個人的利益は平等に保証されねばならない。「…調和を維持するためには、ある部分が他の部分をしのぐようなことがあってはならない。すなわちこれらのあらゆる取引において、誰もがそこで同じく利益を得られるようにバランスは均等でなければならない」 ([2], p. 830)。この相互的効用あるいは利益の平等が実現されているかどうかの指標は価格である。こうして、「[このような幸福な状態が続くためには] すべての事物およびすべての

物産は絶えず均衡の状態になければならず、それら相互のあいだでまたそれらを生みだすのに必要であった費用の点で、比例価格 (un prix de proportion) を維持しなければならない」 ([4], p. 993)。結局、すべては比例価格が維持されるかどうかにかかっているのである。

ここでわれわれは、前稿で十分に論じられなかった点にしぼって、ボワギルベールの比例価格論を検討しよう。何より問題なのは小麦の価格である。

「こうして小麦の買い手と売り手とのあいだで争いが生じる。ところで小麦以外のあらゆる物産の取引においては、ある者はただで商品を手に入れようとし、またある者は通常の4倍も高くそれを売ろうとするだろうが、商人はあわてたり焦ったりしない。というのは、買い手が求めている物産は絶対にそれなくして済ませないほどの不可欠の必要性がいつもあるわけではないという事情に加えて、隣人は同じ物産を家に豊富にもっているから比較的道理をわきまえて振る舞うだろうし、また商人にも道理をわきまえさせるからである。あらゆる種類の物産の取引に秩序 (la police) が生まれるのもそのためである。ただし小麦の場合は別である。なぜなら小麦はなくてはならないものであり、それを買うことは絶対に必要であり、売ることも同様だからである。農業者は小麦を手に入れようとする者が食わずに済ますことができないのと同様に、自分の持つ小麦を売らないで済ますことはできないのである。この取引に無秩序が生じるのも、これらふたつの必要のせいである」 ([2], p. 848-849)。

このように小麦は生活必需物資であるから、買い手の買う意志は強く、売り手も同様である。このような特殊事情に、小麦の生産が天候の異変など自然的諸条件に左右されるという厄介な事情が加わる。このような事情のもとで小麦の取引が厳しく規制されれば、一体どのような結果をもたらす

だろうか。豊作の年は価格の低落、不作の年は価格の高騰にそれぞれ一方的に身を任せるよりほかなすすべがない。どちらも有害である。彼はいう。「高価が短剣で刺すことだとすれば、低価は毒を盛ることだ。結局同じ結果をもたらす」([2], p. 847)。生産と消費の一致に対する最大の脅威はここにある。「正義のルール」を乱す者も富裕者の貨幣愛も姿をひそめたとしても、統制経済によって小麦の「妥当な価格 (un prix raisonnable)」([2], p. 840) の実現が妨げられれば、経済均衡あるいは自然的秩序は根本から崩壊してしまう。「小麦が低価なときほど、すなわち小麦の価格がほかの物産につけられる価格と釣り合いを保っていないときほど、人民が不幸なことはない。なぜなら、このときからお互いがお互いを生ぜしめ合うところのあらゆる職業のあいだになければならない絶えざる交流が、完全に途絶えてしまうからである」([2], p. 871)。小麦の低価によって土地所得が減少し、前にみた累積的な収縮過程が生じるのである。

小麦の場合、需要量は現実の消費量に等しく、それはまた絶対的な必要量でもある⁽⁸⁾。したがって「買う必要」は価格に応じて変化するのではなくて、市場の供給量に応じて変化する。そして「買う必要」の変化が価格を変化させる。たとえば小麦の必要量に対して供給量が少なければ、それだけ「買う必要」は大きくなり、買い手の競争を招いて価格は騰貴する。一方、小麦の供給量は小麦の存在量ではなく、文字通り市場への供給量である。「…最高の決定権を持つのは市場だけであって、どれほどであろうと市場や穀物倉や小作地の納屋にありうる小麦の量ではない。市場に20袋多くあるか少なくあるかが、穀物の運命を決めるのである」([2], p. 862)。この供給量は「売る必要」によって規定されている。「売る必要」の基準は供給者が小作料や費用等を勘案して胸中に抱く必要売上高である。うえで述べたように、必要量(需要量)に比べて供給量が少なければ、「買う必要」がまさって買い手同士の競争が生じて価格が上昇するが、これにより「売る必要」は低下する。価格の上昇によって、相対的に少ない販売量で必要売上高を得ることができるからである。逆に必要量に比べて供給量

が多ければ、今度は「売る必要」がまさって供給者間に競争が生じ、価格が低下する。価格の低下によって「売る必要」はますます大きくなり、低価で大量に販売せざるをえなくなり、必要売上高を下回るばかりか必要量の超過分には買い手さえつかない。まさに「市場に持ち込んだ小麦袋のひもをほどかないまま持ち帰らねばならない」([2], p. 849) 状況である。

供給者間の競争を彼は次のように述べている。「買い手なら誰でも商品が多くあることと商人が大勢いることが利益になる。ほかの者よりも多く売りさばこうとする競争が生じてかれらはお互いに物産を値引きし合うからである。反対に、物産が数少なく、競争者があまりおらず買い手がほとんど言い値で買い取らざるをえないことが保証されている場合には、商人はもっとも有利に販売できる」([2], p. 849)。続いて供給不足のときの需要者間の競争も示唆されている（「[このときには] 農業者は穀物を荷をほどかずに持ち帰るところか、それを市場に運び込む苦勞さえしない」*ibid.*）。しかしいずれにせよ、統制下に置かれた小麦市場の場合、このような競争によって均衡価格が成立する保証はまったくない。むしろ競争は均衡価格からの乖離を大きくするだけである。小麦市場で「買う必要」と「売る必要」が一致して均衡価格が成立するのは、現実に必要な量（需要量）と供給量が一致したときだけである⁽⁹⁾。

したがって、小麦の取引を自由にし、豊富のときには海外に需要を求め、欠乏のときには輸入によって供給量を増大させることが何より重要となる。交易が自由であれば、供給不足による高価に魅せられて外国人が小麦を持ち込み、これとともに供給量は増えて価格は低下する。逆の場合は逆のことが生じる。論理的に言えば、小麦の価格はケネーの「良価」と同様に、長期的には国際的平均価格に一致するであろうが、ここでのボワギルベールの視点は短期のレベルにとどまっている。ともあれ、この小麦の均衡価格が基準価格として他のあらゆる財の価格を規定する。たとえば、「靴屋が靴の値段を4フランと決めたのは、この値段が穀物と釣り合った水準にあるからである」([4], p. 996)。ほかに、費用を構成する賃金が

小麦価格に左右される次第は十分に分析されている。もっとも賃金は小麦価格の上昇には敏感に反応するが、その下落に対しては硬直的である ([1], p. 610, [2], p. 875)。

こうして「あらゆる物産に取り決められる [価格の] 高さの水準およびさまざまな釣り合い」([2], p. 840) が設定され、その安定性は自然あるいは神慮の働きによって保証される。

「したがって、自然あるいは神慮だけがこうした正義を守らせることができる。…それらは何より、利益の願望だけが売り手であれ買い手であれあらゆる取引の魂であるというように、あらゆる種類の取引において売りと買いの必要を等しくする。このような均衡あるいはバランスのおかげで、売り手も買い手も同じく道理をわきまえ、道理に従うように導かれるのである」([4], p. 992)。

ファッカロロは、「ここにみられる一語一語はまさに競争のメカニズムを表すものである」⁽¹⁰⁾として、この行文に均衡的競争の観念を読み取っている。われわれはこれだけからそのように断定することには、いささか躊躇を覚えざるをえないが、いずれにせよ、ここに個人的利益と個人的利益を調整する何らかの自律的作用が想定されていることは明らかであろう。彼はいう。「これらの場合に正義が維持されるのは剣の切っ先によるほかない。自然や神慮が引き受けるのもその役割である。そして、自然や神慮は、強く生まれながらに何か武器を持ち、殺戮に明け暮れ、したがって命をやり取りしながら暮らす動物の餌食にならないように、弱い動物には隠れ家や防御の手段を与えたのと同じように、自然に任せているかぎり、強者が貧しい者の物産を買うときに、この販売によって貧しい者が自分の生計を得られなくなるほどの力をこの強者がもたないような秩序を設けた。自然の働きに任せるかぎり、すなわち自然に自由を与え、それを保護し暴力を排除する目的のほかには何であれ自然に介入しなければ、このような秩

序が維持されるのである」([3], pp. 891-892)。あるいはこうもいう。「それぞれ誰もが各自の技能や職業に応じてあらゆる種類の仕事や商業とくに農業を完成に導くさまざまな登場人物あるいは演技者のあいだに、自然だけが作りうる必然的秩序がある。それはけっして権力によっては作りえないものである」([2], p. 874)。こうして、人為を排して「自然だけが作りうる必然的秩序」に身を任すだけで十分である。自然あるいは神慮の強制力によって「正義のルール」が順守されるからである。

われわれとしては、自然というこの安定化装置の内容に不透明感を拭うことはできない。論述の曖昧さもさることながら、「自然の働きに任せる」といっても現実には主に交換＝流通過程の自由が主張されるばかりで、ファッカレロ氏のようにそこに市場メカニズムを読み込むならば不可欠とも思える、労働の自由を含む生産過程全般の自由の主張をほとんど聞くことはできないからである。彼はコルベルティスムによる小麦取引の統制にはあれほど反発しながら、諸要素の自然的運動の妨げとなるはずの当時の産業規制や産業独占に対しては、ほとんど何も語っていないのである⁽¹¹⁾。

自然の内容は不透明なヴェールに覆われているといわざるをえないが、しかしともかくも、われわれはここに富裕者の貨幣愛の問題を別にすれば、自然の自由な働きによって比例価格は維持され、相互的効用あるいは利益の平等が実現されるから、分業＝交換関係の自然的過程は順調に進行し、生産と消費の一致も保証される、という展望をうかがうことはできる。そして、ボワギルベールが「自然」や「神慮」を語る時、われわれはケネーの場合と同様に、そこに人間の意志の及ばない超越的存在を感じ取るが、しかし一方では、「自然だけが作りうる必然的秩序」とはいうものの、彼にとってこの秩序を生み出す動因は人々の「豊かさへの願望」あるいは「利益の願望」であり、これらに促されて文明化の自然的過程が進行するのであった。したがって、この必然的秩序は人間の作為には超越的であっても、人間の自然的衝動に対して超越的なわけではなく、むしろそれを秩序形成の動因として抱えもっている。まさに諸要素の自然的運動がこの秩

序を導くのである。ここにわれわれは、素朴ながら、経済の世界においては、欲求充足の動機に促された人間の自由な主体的行動の結果として、自足的な秩序がおのずから形成されるとする理論的展望を垣間みることができよう。それはまた、すでにみたように一定の文明史的認識に支えられてもいた。これらの点でボワギルベールの自然的秩序の観念は、ケネーの、歴史性を排除した、「自由な人間の行為の帰結ではなくて、人間が服従すべき既存の秩序」⁽¹²⁾ としての自然的秩序の観念とは異なっているといえよう⁽¹³⁾。

(注) (8) 彼はフランスにおける可能な生産量と通常の消費に必要な量とを推計し、フランスでは通常の年度に必要な量より半分多く小麦の生産が可能であると述べている。したがってフランスでは常に小麦の過剰生産の圧力が存在しており、その排出を自由に行うことができなければ、通常の年度でも小麦の低価は必然である ([2], pp. 854-855)。

(9) もっとも必要量と供給量が完全に一致するまで待たなくても均衡価格は成立する。予想作用が働くからである。「実際、市場あるいは公設の市では毎週、通常500セチエの小麦が売られるが、そこでは20セチエの増減の変化があるだけで、かならずやこの同じ穀物 [の価格] は激しく上昇もしくは下落する」 ([2], p. 859)。あるいは、「[小麦を] 積んだ一隻の船の到着は一種の奇跡を引き起こす。というのは、人々はそれは近いうちに到着する予定のもっと大量の財貨の第一陣なのだかならず考えるからである」 ([2], p. 863)。

(10) Faccarello, *op. cit.*, p. 228.

(11) 労働の自由を含む国内における営業の自由が強力に主張されるようになるのは、フランスでは18世紀の中葉、グルネやフォルボネ等によってである。グルネはいう。「私は100項目の規制に…勤労者を破滅させる100の手段しかみいだせない」 (*Traité sur le commerce de Josiah Child avec les remarques inédites de Vincint de Gournay*, éd. par T. Tsuda, Tokio, 1983, p. 253.)。かれらは就労人口論という形の素朴な生産力論に基づいて、国内における労働の自由および反独占の立場を貫いた (筆者の「18世紀中葉におけるフランス経済学の一動向——グルネとフォルボネを中心として——」『経済学研究年報』[早稲田大学大学院経済学研究科], 第22号, 昭和58年を参照)。あとでも述べるように、ボワギルベールの論理はひたすらフランスの潜

在的な農業生産力に対する絶対的な信頼を前提としている。彼の自由の主張に生産視点かばやけているのも、またもっぱら交換＝流通過程の自由のみを際立たせることになったのも、そのような論理構造に理由のひとつがある。

(12) 木崎喜代治『フランス政治経済学の生成』、未来社、1976年、128ページ。木崎氏はこれに続けて、「すなわち、『経済表』が示す政治体の秩序は、人間の自由な行為の帰結としての自動的体系ではなくて、物理的秩序つまり再生産の秩序への人間の適合的な行動をまっぴらに始めて正常な運行をなす体系である」と述べておられる。もっとも、ケネーの秩序が人間の作為の及ばないことは明らかだとしても、しかしケネーも「人間が感性的存在であるという命題のうえにその全科学を樹立した」（同上、138ページ）のであれば、完全にうえのように言い切れるかどうか疑問なしとしない。

(13) ボワギルベールの想源にジャンセニスムの社会観や人間観があることは、ファッカレロ氏によって詳細に分析された。メソニエ氏もとくにドマの法理論を取り上げてその影響を指摘している。国家権力に対して個人的権利を守ろうとしたドマは、「法の原理は人間的自然のなかにある」（*Meyssonier, op. cit.*, p. 48）として社会秩序を人間の心理面から基礎づけ、社会秩序原理の世俗化に一段の飛躍をもたらしたとされる。

2. 大衆消費

自然的過程として生産と消費の一体的なシステムが歯車をがっちりとかみあわせて進むとはいっても、現実には脆い構造をもっていることはすでに述べた。富裕者の貨幣愛とかれらによる支出の差し控えずなわち貨幣の退蔵の可能性があるがその原因であったが、このシステムを維持するうえでより問題なのは後者である。貨幣愛に比べて、支出の差し控えの傾向は容易に一般化し、富裕者の全体に及びうるからである。もともとボワギルベールの一般的相互依存の体系は因果的、循環的な特徴を備えていたから、のちにシスモンディが販路説批判の論拠としたのと同じ生産-所得-消費の時間的過程を前提にしている。したがって、状況次第ではこれらの相互関係に齟齬が生じる危険性が常に存在していることになる。まさに富裕者による貨幣の退蔵は、消費購買力を眠らせ、時間的過程を攪乱し、したがって

生産と消費の一致を危うくするものである。消費主体にすぎない有閑階級が所得循環の中心に位置しているため、この危険性はいつでも現実のものとなりうる。ただし、好況時にこのような行動をとるのは不合理な愚策であると彼はいう。「商業が活発に行われているときに商人にとって最悪の状態は、金庫のなかに無用の貨幣を所有することである。なぜなら、それは何も生みださないからである。しかし商業が順調に行われていないときには、貨幣が家の外に出ないほうが彼には有利である。というのは、たとえば彼は得るものが何もないとしても失うものも何もないからである。…かれらは資本を失う危険を冒すよりは利益を失うほうを選ぶ。…そして商人にいえることはラントで生活するあらゆる人々にもあてはまる」([1], p. 619)。

したがって、富裕者のあいだでこのような支出の差し控え＝貨幣の退蔵が一般化するのには経済危機が生じたときだけである。このときかれらは先行きへの不安から支出を減らし、経済危機を深刻化させる。

「富裕の時期には、人々は貨幣をある場所で受け取るとただちにそこから外に出そうと考えた。そして驚くこともないが、貨幣はときとして同じ日に、貧困の時期に比べて100回も多く持主を変える、すなわち貧困の時期よりも100倍も多い消費を、したがって所得を作りだすのが常であった。…しかし、別の状況にあれば、貨幣は亀のようにのろのろと歩む。…貨幣の所有者は生活を切り詰めてもっぱら貨幣を手元にもっておこうと考える…。人々は支出を減らすことで身を守るが、それによって貧困は増幅され、したがって貨幣の希少もはなはだしくなり、困難はますます大きくなる」([4], p. 999)。

しかしこうなると貨幣を退蔵するのは富裕者にとどまらない。「貨幣は以前なら一瞬たりとも手元に置かなかつた人々の手元に何カ月もとどまる。…[労働者であれ土地所有者であれ] あらゆる臣民は将来の収入の減少が確

実であるときには、それだけ支出を減らし、したがって貨幣の持ちだしを減らしてしまう」([4], p. 969)。

こうしてみると、有閑階級は確かに、貨幣愛や好況時の貨幣の退蔵といった不合理な経済活動によって絶えず生産と消費の一致に対する攪乱要因であり続けるとはいえ、そのような不合理な経済活動を除けば、あるいはひとたび経済危機が表面化したときには、有閑階級の支出の意義と生産者大衆のそれとのあいだに基本的な違いはない⁽¹⁾。有閑階級は生活に余裕があるから先行き不安に敏感に反応しうるのに対して、余裕のない生産者大衆はめったにそうはできないという程度の差があるだけである。この場合、両者の消費主体としての存在意義に基本的に質的な差はないといえる。経済危機を克服するために、有閑階級の奢侈的消費に積極的な機能が求められているわけでもない。そもそも、この所得循環あるいは消費循環のなかでは、有閑階級はあくまで「仲介役」にすぎず、かれらの奢侈的消費が突出した意義を担っているわけではなかった。この点で、社会的需要の構造的不足を前提に、それを補う役割を富裕者の奢侈的消費に期待する論理とは基本的に異なっている。また、それとは違った観点から地主の奢侈的消費に積極的な意義を認めたカンティロンやケネーとも異なっている⁽²⁾。ボワギルベールにとって、かれらはマイナス要因となる場合の方が多いといえよう。

(注) (1) もちろん消費の対象はそれぞれで異なっており、富裕者の欲求に応じて職業や製造品の種類が規定されるという違いはあるが、しかし社会全体の消費購買力あるいは有効需要の観点からみれば、両者の消費に基本的な違いは認められない。

(2) カンティロンにとって、地主は社会の消費動向を決定する主役として経済のなかで中心的役割を担っている。「農業者や職人はその日暮らしを暮らししており、必要によって生活様式を変えるにすぎない…。(一方)地主は土地生産物の3分の1を自由にできるから、消費に生じうる変化の主たる動因である」(Cantillon, *Essai sur la Nature du Commerce en Général*, 1755, I. N. E. D., Paris, 1952, p. 35)。一方で、「一国において労働が多ければ多いほど

その国は豊かだとみなされる」(ibid., p. 148) から、国富増大の原因は勤労＝就労人口の増加にある。人口増加のためには国内の雇用機会を増加しかつ人口を養う食糧を確保し増大しなければならない。こうして地主の消費支出の向かうべき方向が明らかとなる。すなわち、地主が外国の製造品を取り寄せ、これと引き換えに自国の農産物が輸出されれば、代替財を生産する国内の製造業者は職を失い、自国民の消費にあてられるべき食糧もその分失われてしまうから(ibid., pp. 37-48)、国産品を愛用するなどして就労人口の増加を導くように国内消費を主導しなければならない。地主の消費支出の主導性は明らかであろう。ケネー経済学において地主が中心的な位置を占めていることはいうまでもない。ケネーは地主の主導性の議論を彼独自の純生産論と結合し、地主の消費支出が農産物により多く向けられることによって再生産の拡大が可能であると説いた。(以上の点については、拙稿「経済循環と地主の消費支出——ボワギルベール、カンティロン、ケネーをめぐって——」、『経済学研究年報』、第24号、昭和60年を参照)。かれらの経済学には基本的な点で多くの違いがあるが、地主主導論に関するかぎり、社会的余剰の全取得者たる地主の消費支出が社会の消費動向あるいは需要構成を決定づけ、これに導かれて経済社会の構成が決定されるとする論理を、ともにみることができる。カンティロンがケネーに影響を与えたものと思われる(もっとも、ケネーの前払い—純生産の理論はそのような地主の消費主導論と結合されたため矛盾に陥ったことも、いまや周知のことであろう)。そこでは地主が単なる「仲介者」でないことは明らかである。一方、それは社会的需要の構造的不足を前提として地主の奢侈的消費の意義を強調する論理とも異なっている。

以上の観点は、価値保存機能をもつ貨幣の退蔵による不均衡すなわち生産と消費の不一致の可能性を論じるものであった。そしてそれは、これまでみてきたように、有閑階級の不合理な活動を除けば、経済危機の二次的原因あるいはその拡大要因にすぎなかった。したがって、それは自然の自由な働きによって経済が順調に推移するかぎり基本的には顕在化しない。これに対し、経済危機の直接的原因は一般消費水準への打撃である。これによって消費水準は全体として低下し、過少消費による過少雇用(過少生産)が発生したのである。ケインズの用語でいえば、不完全雇用均衡の事態に陥ったのである。

「土地生産物の販売価格が低下し、その余剰量が減少したため、フランスのあらゆる所得が減少をこうむっていることが明らかとなった。どちらも消費の欠乏の結果である。この世のあらゆる財は消費されるのでなければ無用である。したがってフランスの破滅の原因を知るには消費の破滅の原因をみつければ十分である」([1], p. 590)。こうした事態によって、「現在では有効に利用されているのは [国土の] 半分にすぎず、残りは完全に放棄されるか、あるいは可能なかぎりあるいはむしろかつて行われていたほどにはとても耕作されていない…」([1], p. 589)。

消費購買力に関して、有閑階級のそれと生産者大衆のそれとで基本的に質の差はないとすれば、あとの問題は一般消費水準に及ぼす量的な影響はどちらの方が大きいかである。社会の圧倒的部分を占める生産者大衆は、しかも生活に余裕がないから消費性向は有閑階級よりも断然大きい。「零細な人々は数をもっとも多いからもっとも多く消費を行う」([1], p. 620)。「零細な人々こそが国家により多くの所得をもたらす。1 エキュは貧民の手元に1日あれば、金持ちの手元に3ヶ月とどまる場合よりもより活発に移動し、したがってより多くの消費を作りだす。金持ちは大事業にしか手をださないから、自分の貨幣を外に出すには絶好の機会でも大金が満ちるのを長々と待つ。このような態度は国家にとって常に有害である」([1], p. 621)。あるいはまた、「1,000 エキュという金額が1,000人の零細な連中に分配されれば、金持ちの金庫にとどまっていたときよりも短いあいだに10万人もの人々の手を経由するから、その結果10万エキュもの消費が生みだされるに違いないであろう」([4], p. 1006)。しかも、かれらの消費対象はほとんど必需品すなわち農産物に限定されているから、事物の自然的過程を維持するうえで鍵を握る農産物需要あるいは農産物の比例価格は、かれらの支出に支えられていることになる。土地所得が生産者大衆の勤労所得に規定されているというのは、勤労所得からの支出によって農産物の

比例価格が保証されてはじめて土地所得の安定的な確保が可能になる、ということであった。

ここでわれわれはふたつの問題レベルに直面している。前章では農産物の価格低下の原因は、経済が統制下に置かれているため豊富のときに供給過剰が解消されないことにあった。そこで、需給の調整弁としての役割を外国貿易に期待して「穀物取引の自由」論が展開された。一方、ここでの問題は過少消費による農産物の低価である。それは穀物取引が自由化されたとしても解決しえない別のレベルの問題であり、ここからわれわれはボワギルベールの消費主導による動態論的な理論的展望をうかがうことができる。ここでは衰退も発展も一般消費水準にかかっている。経済の統制も一般消費水準への打撃も、どちらも反自然的な「暴力的な行為」([4], p. 1007) であるが、後者は生産者大衆に直接打撃を及ぼすことで自然的秩序を根底から動揺させるのである。ボワギルベールの著作のなかでは時論書の色彩がより強い『フランス詳論』や『フランスの弁護』で力説されているのも、この点の無秩序である。

生産者大衆に打撃を与えた元凶は、税制の欠陥である。

「[消費を減少させた] 原因は基本的にふたつある。その原因は何らかの公益の結果であるどころか、反対に、もっぱら何らかの個人的利益の結果として生じたものにすぎない——それをやめさせたり変えさせたりすることは簡単であって、そのために個人的利益が損なわれることはほとんどない。消費が途絶したのはそれが絶対的に禁じられ、絶対的に不可能になったからである。第1の原因はタイユの不確実性にある。タイユはまったく恣意的なものであって、貧しければ貧しいほど税率は高くなるというほかにいかなる確かな基準もない。…豊かであればあるほど、また莫大な収入を得ていればいるほど税率は低い。…最後に、消費はエード [飲料税] ならびに王国の出国関税と通行税によって不可能となった」([1], p. 590)。

このうち、物資の自由流通を妨げる出国関税と通行税は生産と消費の一致に対する打撃となりうるものであって、『フランス詳論』でのこれに関する詳細な現状分析は、のちに『富論』や『穀物論』で一般化されて「穀物取引の自由」論として敷衍されていく。したがって、ここで問題になるのはタイユとエードである。直接税としてのタイユの恣意性はうへの引用文にもうかがわれるが、タイユのもたらす弊害はほかにも『フランス詳論』でこと細かに述べられている。間接税としてのエードに関しては、徴税が請負制によって行われるようになって以来、請負額は増加の一途をたどり、これにともなって税率が上昇してぶどう酒の価格は法外なものとなった⁽³⁾。これらの現実的問題は統治機構をめぐる政治的な諸問題に深くかかわっているが、経済のレベルでこれをみれば、これらの悪しき税制によって生産者大衆の消費購買力が打撃を受けたことが経済危機の直接的原因であった。消費の減少によって農産物価格は低下し農産物余剰は減少したため、経済は累積的な収縮過程をたどることになったのである。

したがって、このような衰退局面あるいは過少雇用の状態を脱けだすためには税制の改革が焦眉の急である。タイユに関しては、徴税の際の不正を防止する手だてを講じながら人々の担税能力に応じた課税方式に改め、エードは全廃して、一部をタイユの増額によって、残りはほかの税の新設（たとえば暖炉税）によってまかなうなど、彼はあれこれ具体的な改革案を示している（[1], pp. 628-634）。彼の具体的な改革案の当否はどうであれ、彼にとってはこれにより生産者大衆の消費購買力が解放されるはずであった。

「したがってもし金持ちが自分の利益を理解しておれば、貧しい人々に自分たちの税を肩代わりさせるようなことは完全にやめるであろう。これによりただちに大勢の豊かな人々が生まれるだろう。そしてこれによってかならずや消費は大幅に増大し、それは国家全体に及ぶから、こ

うしたやりかたによって金持ちたちは最初に行った前払いの3倍を報われることになるだろう。…過去に行われた逆のやり方では、貧しい人々にすべての税を負担させることにより、結局これらの有力者が儲かったと思いついでいる分の6倍も高くつくことになる」([4], p. 1006-1007)。

こうして、消費を起動力とし原動力としながら、消費→生産→所得→消費→…の消費連鎖⁽⁴⁾が上向きに順調に機能を始め、過少雇用の状態が次第に解消されていく。この消費連鎖は、実態としては所得循環あるいは消費循環を通じて相互関係を維持しつつ、螺旋的な拡大過程をたどるのである。発展局面の出現で、一般的相互依存の歯車はふたたびがっちりとかみあい、「事物はふたたび自然の状態に復帰」するのである。

以上みてきたように、ここにわれわれは消費主導による動態論的な理論的展望をみることができる。そして、ここでいう消費とは何より生産者大衆の消費購買力のことであった。このような大衆消費論は論理的には高賃銀論や所得分配の不平等の緩和の主張と結合しうる。大衆消費が発展局面を生みだす起動力であり原動力であるなら、この点では、生産者大衆の賃金が高いほどまたかれらへの所得分配が厚いほど、経済発展には有利だからである。所得分配の不平等の緩和への傾きはそここにみることができる。たとえば、「1,000エキュという金額が〔金持ちではなく〕零細な連中に分配されておれば…」([4], p. 1006)とか、「貨幣の不断の運動はそれが可動的なかぎり、かつ人民の手にある場合にかぎって生じうるにすぎない」([1], p. 621)などの行文にうかがうことができる。「華美と豊饒はここにきわまれり、とはいってもそれはわずかな人々だけの話であり、大部分はひどい赤貧に陥っている」([1], p. 587)と嘆くこの「人民の弁護士」にとって、人道主義の観点からばかりか経済学の観点からも貧者の救済が急務の課題であったことは、これまでみたところから明らかであろう。

また、外国貿易の機能は限定されたものであり、主に穀物の需給の調整弁の役割が期待されたにすぎなかったから、彼は重商主義者のようには高

賃金による交易条件の悪化を恐れる必要はなかった。しかし、こうした観点に立って、自覚的に高賃金論が展開されていくわけではけっしてない。反対に、彼は賃金は小麦価格の上昇には敏感に反応するが、低落に対しては硬直性を発揮し不均衡の拡大要因になるとして、これを槍玉にあげる。

「この連中〔労働者〕は必要に迫られないと働かないのであるが、〔低賃のせい〕でこの連中に対する必要の影響力が失われてしまったのだ。小麦がくず同然であるおかげで1週間分の支出を1日の労働で稼げるとすれば、賃金水準を同じように引き下げるところか、かれらはこうした状況によって立場を強め、自分たちの要求が拒否されてもかなりのあいだ働かなくても暮らしていけることから、もっと高賃金を要求して主人の窮乏に拍車をかけるのである。そして土地の耕作には重要でない時点などないのだから、…農業者はすべてを放棄して破滅するわけにして償えないほどの支出をするか、どちらかの選択を迫られることになる」〔2〕. p. 874。

すなわち、小麦価格の低落による実質賃金の上昇はむしろ労働者の労働意欲を減退させるのである。ここにマンデヴィルの高賃金批判と同じ論理をみることさえできよう。誰もがもつはずの「豊かさへの願望」は、「必要に迫られないと働かない」（農業）労働者には無縁のものだということだろうか、あるいは「豊かさへの願望」は、かれらにかぎって低賃金の状態でこそ労働意欲に転化しうるのであろうか。判然とはしない。しかし、このような労働者観が、彼の論述にときおり顔をのぞかせる大衆蔑視の感情と裏腹の関係にあることは明らかであろう⁽⁵⁾。

結局、次のようにいえる。彼にとっては、小麦価格を一定の水準以上に維持することこそ至上の課題であって、これさえ維持されればあとは基本的に順調な経済の運行が可能である。この意味で、小麦価格の低落を招い

た生産者大衆への打撃を除去し、「貧しい人々に…税を肩代わりさせること」をやめて、かれらの消費購買力を解き放つことが何より問題とされたのである。これにより過少雇用が解消されて自然的過程に復帰すれば、あとは生産と消費が均衡的拡大を遂げていくことは、彼には暗黙の了解事項であった。そしてもちろん、この過程で結果として生じる高賃金や高所得が否定されるわけではない。発展局面での賃金や所得の増大は価格水準に悪影響を及ぼさなければかりか、むしろ生産と消費の拡大過程が順調に機能するためには、生産者大衆の可処分所得が一定の割合で増加することが不可欠でさえあった。しかし、繰り返していえば、それ自体はむしろ発展の結果であって直接の原因ではない。次に詳しく述べるように、生産者大衆の消費購買力の解放によって価格が上昇すれば、富裕が富裕を生むプロセスがおのずから動き出すからである。あとは消費→生産→所得→消費の消費連鎖を阻害しないこと、言い換えれば「国民が受け取るよりも少ない貨幣を支出する必要に迫られない」([1], p. 621) ことこそ肝要であったのである。

(注) (3) これによってどのような事態が生じたか、彼は次のように描いている。「日雇い労働者は日当を受け取るや、ぶどう酒の値段が妥当なものであればただちに1パントのぶどう酒を飲みにでかける。ぶどう酒を彼に売る居酒屋の主人は借地農やぶどう栽培業者からそれを買ひ足す。ぶどう栽培業者はこれによって、職人に仕事を与える自分の主人に支払いを行う。主人は自分の土地を耕作させている人々からどれほど支払いを受けるかに応じて、家を建てたり官職を購入したり、あるいは何らかの可能なやり方で消費を行って自分の情念を満足させる。もしこの1樹4ソルの同じぶどう酒が、われわれが今日まのあたりにしているように税の増額によって一挙に10ソルにまで値上がりしてしまえば、この日雇い労働者は、自分に残された日当では妻や子供を養うのに十分ではないと考えて…水を飲んで我慢する。それによって自分に日当を与えてくれた循環を途絶させてしまい、乞食にまで身を落とすことになる。このような事態は国王の利益を傷つけずにはおかない」([1], p. 620)。

(4) 衰退局面であれ発展局面であれ動態論のレベルにおいて、引金を引くのは常に消費であり、消費の減少と増大を契機としてダイナミックな収縮と拡大

の過程が進行する。支出の差し控えによってこの消費連鎖の相互関係を齟齬をきたせば、衰退が加速されることはすでにみた。また発展局面では、眠っていた生産力が消費水準の回復とともに目覚め、消費連鎖が上向きに機能する。

(5) 大衆の無知蒙昧さはたとえば次のように表現される。「一言でいえば、人民は確かに、非常に狭くて通りにくい入り口を通してなかにいれようとする羊の群れと同じである。1, 2頭の羊の耳をつかんで無理やりそれを引っ張れば十分である。最初の2頭をそこに導くのに必要であったのと同じ暴力を使えば、ただちに残りのすべての羊もそこに導くことができる。そして、かれらの目の前のすぐそばにかなり広い入り口が広がっていれば、同じところにかれらを導くとしてもその通り抜けはずっと簡単であろうから、殴りつけてかれらの態度を決めさせるわけにはいかないであろう。しかしその場合でも、相変わらずお互いに押し合いへしあいしながら、先頭に続こうとするであろう。人民とはそうしたものであり、騒々しくかけずり回るかれらのやり方はそのようなものである。小麦のことにになるとくにそうである」([3], p. 934)。

このような消費主導による動態論的な理論的展望を、生産の実物的側面から肉付けしてみよう。過少消費による過少雇用はどのような実物的過程をたどって解消されていくか、すなわち生産者大衆の消費購買力が解き放たれることで生産力はどのようにして目覚めていくか、という問題である。ここで問題なのは、いうまでもなく農業生産力である。

農業生産の規模を決定する要因は何より穀物価格である。まず費用が補償されることの重要性を彼は次のようにいう。

「栽培するのに費用の要らない土地の果実など何ひとつない。土地の果実の栽培は、事物を完全なものにするために前払い(avances)をどれほど行ったかに応じて実を結ぶ。前払いは果実の売れ行きには関係なくいつも同じ額であって、売れ行きが費用を償うのに十分でなければ、その結果、次のような事態となる。その後は同じだけの前払いは行われず、かつては大規模に耕作されていた土地は完全に放棄されて、生産物はかつての半分に減少するばかりかゼロにさえ落ち込んでしまう。そしてこ

のような損失は広く全国に及ぶ」([1], pp. 584-585)。

あるいはこうもいう。「[土地の果実の]生産は偶然の結果でもなければ、自然の無償の贈り物でもない。それは絶えざる労働と貨幣の代償によって購われる費用の結果である」([4], p. 988-989)⁽⁶⁾。ここにはのちの重農主義的な曖昧さは微塵もない。土地所有者が手にする地代は単なる不労所得にすぎなかった。

ところで、前払いあるいは費用の総額および内訳は土地の肥沃度に依りて異なる。

「もっとも肥沃でもっとも自然に恵まれた土地と、…耕作にも牧畜にもまったく適さないもっとも恵まれない土地とのあいだには、100以上もの等級の差があることは確かである。実際、…きわめてわずかな数にすぎないとはいえ、2頭の瘦せた馬だけで年に100アルパンを耕作し、1日2アルパンを埋め戻し掘り起こすことができるような土地もある。そこでは肥料はまったく必要ない…。1粒の種子で20粒の収穫をあげずにはおかない。毎年そうであり…ほかのほとんどすべての土地で行われているようには土地を休ませる必要はまったくない。一方、大部分の土地では、肥料を用い、馬の数を増やしたりして絶えざる労働が必要である。土地はもっともよく鍛えられた鉄をも絶えずはねつける。このため少なくとも1年につき3年土地を休ませる必要がある。しばしばそれ以上、続けて7、8年、またときには15年から20年も休ませる必要のある場合さえある。それは小麦の価格が耕作を行ってもその費用を支えることができると思える水準にあるかどうかで決まる」([2], p. 835)。

これに続けて、彼は地味の劣った土地で要する小作料や耕作費用（種子、鋤の刃も痛みやすいからその修理代、肥料、収穫の際にかかる費用など）を具体的に算出し、価格がその合計を下回ると、農業者はやがて土地を放

棄せざるをえなくなると述べている。

このように、肥沃度の差によって費用の総額および内訳に違いが生じる次第が明確に示されている。彼が農業における収穫逓減あるいは費用逓増を想定していることは明らかである。ここで注目すべきは、彼が「それは〔肥沃度の劣った土地が耕作されるかどうかは〕小麦の価格が耕作を行ってもその費用を支えることができると思える水準にあるかどうかで決まる」と述べている点である。すなわち小麦価格の水準に応じて、農業生産の規模が決定されるのである。ほかでも彼は次のように明言している。

「人の記憶するかぎり何も育ったことのないもっとも劣悪な土地から、もっとも自然に恵まれた土地にいたるまで、種を蒔くのはもっぱら穀物の価格であることを明らかにしよう。…さまざまな肥沃度(*degrés de fécondité*) すなわち収穫の不毛性や豊かさに関しては、さらに下位区分あるいは細別が存在する。この同じ価格からそれぞれの水準あるいは序列に応じて収穫量が定まる。この価格が、土地経営に必要な費用をどれほどかけることができるかを決めるのである」 ([2], p. 854)。

需要が小麦の価格を規定する次第はすでに明らかだから、たとえば、生産者大衆の消費購買力に打撃が与えられて小麦価格が低落すれば、費用が少なくて済む相対的な優等地だけが耕作されることになる。「農業者に中等の土地 (*les médiocres terres*) の耕作をやめさせ、各地で最良の土地を粗略に扱わせ」 ([1], p. 615) ている現状がまさにこれである。逆に、生産者大衆の消費購買力が解き放たれば、小麦価格は上昇し、眠っていた農業生産力が目覚め始める。「農業者は荒蕪地を耕作し、失われていた物産を販売できるようになる」 ([1], pp. 625-626)。いわゆる劣等地耕作が進展していくのである⁽⁷⁾。

ここでは小麦価格の上昇を契機として過少雇用が解消されていく過程を論じているが、この論理は自然的過程における生産力の拡大過程の説明に

もあてはまる。というのは、彼にとって過少雇用の現状を脱却してポルベール以前の「かつての自然状態に」復帰するというのは、フランスの潜在的な生産力を可能なかぎり顕在化させることと同じことだからである。「[国土は現在では]可能なかぎり、あるいはむしろかつて行われていたほどにはとても耕作されていない…」([1], p. 589)などの両者が対をなした表現は随所にみられる⁽⁸⁾。したがって、自然的過程においても、生産と消費の均衡的拡大を生じさせる直接の動因は小麦価格の上昇であると考えてよい。ただ、この場合に小麦価格を上昇させるべき需要の増大がどこからくるか、判然とはしない。文明化の進行は人口や所得の増加をとまなうはずだから、全体として農産物需要の趨勢的増加が生じるであろうことを、われわれが予想しうるだけである。

いずれにせよ、大衆の農産物需要が喚起されることで、劣等地耕作が進展し潜在的な農業生産力が顕在化するにつれて、消費連鎖は螺旋的な拡大過程をたどるから、「ふたたび事物の自然の状態に復帰」とともに、望みうる最大の「一般的富裕」が実現されるであろう。ここに、われわれはポワギルベールの消費主導によるダイナミックな発展の長期的展望をみるができる。そして、それはまた彼の自由主義の経済的帰結を物語るものでもあった。彼は『富論』で次のように述べている。

「このように自由に任された自然は、そのあらゆる権限を回復してただちに商業を再建し、あらゆる物産の価格の釣り合いを回復するだろう。これによりあらゆる物産はやむことのない流転を繰り返し、絶えずお互いがお互いを生みだし、お互いに維持し合って、各人が自己の労働と地所に応じて手に入れる富裕が一般にわたって形成されるだろう。そしてこの一般的富裕は常に増大に向かい、これらのあらゆる源泉の元である土地がもはや提供できないところまで達するであろう。そうなれば、土地であれ何であれ、あらゆる事物が自然のないうるかぎり有効に利用されたときの、どれほどか豊かな富をまのあたりにすることになる、と考

えられる」([4], p. 1007)。

(注) (6) マルクスは『経済学批判』のなかで、「商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産的活動に、交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ベティに、フランスではボワギユベールに始まり…」(『経済学批判』、『マルクス・エンゲルス全集』, 第13巻, 36ページ)と述べた。ボワギルベールの名前がわが国でもかくも知られてきたのも、この有名な一節のおかげである。マルクスは続いて、「ボアギユベールのほうは、個々人の労働時間が特殊な諸産業部門に配分される正しい比率によって「真実価値」を規定し、そして自由競争をこの正しい比率をつくりだす社会的過程であると述べて、意識的ではないにしても、事実上、商品の交換価値を労働時間に分解している」(39ページ)と述べている。マルクスはボワギルベールの論説に労働価値論をみだしたことになる。しかし、マルクスがボワギルベールのどの論述をもってそのように断定するのはまったく不明である。あえていえば、この引用文にみられるように(「土地の果実の生産は、絶えざる労働の…結果である」)労働が価値を生むひとつの原因であるという素朴な認識はみられるが、しかしそれはいわば常識論のレベルにすぎないというべきであろう。彼の真意は、むしろ賃金をその一構成要素として含む費用が補償されることの重要性を説くことにあった。

(7) 以上のように、おぼろげながらここにはのちの差額地代論の理論的根拠が示されている。もっとも違いもいくつかある。結果的に最劣等地での生産費と小麦価格とはほぼ一致するはずであるが(「劣った土地では品質も落ちる」[2], p. 835から、小麦価格はかならずしも一様ではない)、しかし最劣等地での費用が価格を規定するのではなく、価格水準に応じてどれだけの費用を要する土地の耕作が可能であるかが決まるのである。そして何より、劣等地耕作が進展した場合に優等地で生じているはずの超過利潤の認識をはっきりと読み取ることにはできない。ただ、「[小麦の価格が費用を上回れば]主人も農業者も下僕も労働者も等しく利益を得るであろう」([2], pp. 835-836)と述べられているだけである。

(8) ボワギルベールの議論は『フランス詳論』でのコルベール批判に始まる。彼にとって、フランスが自然的秩序から乖離し衰退を始めたのは、コルベールが財務長官に就任してからのことであった。したがって、統治機構にかかわる諸問題を含めて、コルベールティズムに起因する諸悪弊を排除することで「事物を自然の状態に復帰させる」ことができる。しかし、このかつての秩序に戻る

という議論は、「フランスは自然がその好意から与えてくれたように思える有利さに応えられるかぎり応えていない」([1], pp. 581-582) という議論と常に表裏一体をなしている。したがって、彼にとっては、コルベール以前の状態に戻るというのは、望みうるかぎりの「一般的富裕」を実現することと同義である。

結び

ボワギルベールは一貫して理想的経済状態としての経済の自然的秩序を前提とし、これに照らして現実のコルベルティスムの反自然的な性格を槍玉にあげる。スミスが「自然的自由の体系」を論理的前提に置いて、重商主義的諸政策を論難するのと同じである。周知のように、スミスの自然的秩序あるいは自由主義の観念は人間的自然に関する倫理的な考察に裏付けられており、そして経済学的には何より生産力論によって貫かれていた。これに対し、ボワギルベールの自由主義の観念は、道徳的、政治的秩序の自律性にまで及ぶものではなく、主として交換過程に着目しつつ、経済世界における既存の諸要素の連帯による社会的均衡を説くものにすぎなかった。この意味で、経済秩序の自律性は既存の秩序体系のなかで十分にその機能を発揮する。もっとも、第1章でみたように、彼の自然的秩序の観念は素朴ながら人間の自由な行為を秩序形成の動因としていたから、この点では、確かに、生産過程をも含む経済秩序の自律性が社会の総体的秩序を包摂し、やがて既存の秩序体系を無効にする可能性をはらんでいたともいえる。

一方、スミスは生産力論において、消費に依存しない生産力の自己増殖の論理を展開した。すなわち、消費の増加にともなう価格の上昇を契機に生産力の拡大を計るのではなく、正常価格に組み込まれた利潤を節約によって蓄積することで、生産力の自律的拡大を目指す論理である。ここにスミス経済学の最大の貢献のひとつがあることはいうまでもない。これに対し

て、ボワギルベールが「[どのような職業に従事する者であれ]かれら誰も願ひおよび期待は、農業者ができるだけ多くを耕さざるをえない割合を価格が維持することである」([4], p. 837) というとき、価格をその割合に維持するのは一般消費水準すなわち大衆消費においてほかにはない。すなわち生産力の拡大には、消費の増大による穀物価格の上昇によって価格が費用を補償しかつ上回ることが、絶対条件であった。これが満たされれば、第1章でみた有閑階級と生産者大衆との連帯を含む諸要素の相互依存関係を通じて、生産と消費の均衡的拡大がもたらされる。この次第は過少雇用を前提にした消費主導論においてより鮮明に現れていたことは、これまでみた通りである。同じ議論はケネーにもみられる。ケネーにとっても、フランス農業を再建し『経済表』の理想的世界を実現するためには、内外商業の自由化を通じて穀物需要を安定的に増大し、穀物価格を上昇させることが不可欠の条件であった。これにより価格はより大きな前払いを支えることができる。両者とも同じく農業重視の立場から穀物価格の上昇を眼目とする消費主導論を説いたのであった。もっとも、ケネーが前払い＝純生産の論理を軸に国民経済における農業生産力の拡大の意義を説いたのに対して、ボワギルベールは諸要素の連帯の論理によってこれを説明した⁽¹⁾。いずれにせよ、われわれは両者の消費主導論の背景に、ともに農業王国フランスの潜在的な農業生産力に対する絶対的な信頼をうかがうことができる⁽²⁾。かれらにはこれの顕在化こそ、ほかのあらゆる事項の従属すべき最優先課題であったのである。

スミスの論理が「マニュファクチュア段階の最高期＝産業革命の始期という新段階にひとり立つイギリス資本主義」⁽³⁾を背景にするものであったとすれば、そのような条件の熟さない当時のフランスにあって、ボワギルベールはみずからが直面した客観的状況を踏まえて、スミスにはみられない独自の不況の経済学を展開したのである。そこにわれわれは彼の消費主導論の積極的意義をみいだすことができよう。生産と消費の歯車がちりとかみあって進むべき自然的過程の観念を論理的前提に置きながら、こ

のような不況の経済学を展開したボワギルベールの理論的展望によって、経済学の多様な可能性のひとつがいち早く現実のものとなったのである。

(注) (1) 農業を基本とする諸要素の連帯の構想は、18世紀を通じてフランス経済思想の共有財産となった。たとえばメソニエ氏が次のようにいうとき、それはまさにボワギルベールこそがいち早く掲げた命題そのものである。「[1792年の] モルレの議論は、1750年頃の自由主義の盟友たち、とくにヴァンサン・ド・グルネが掲げた命題の繰り返しである。すなわち、商業上の交換が経済的欲求の相互依存性と利益の均等による社会的紐帯を維持するかどうかは、相互利益の連帯的な連鎖にかかっている、とする命題である」(Simone Meyssonier, “Deux économistes sous la Révolution: François Véron de Forbonnais et l’abbé Morellet”, dans G. Faccarello et P. Steiner éd., *La Pensée économique pendant la Révolution Française* [Actes du Colloque International de Vizille], 1990, p. 113.)。

(2) ボワギルベールはいう。「フランスの国力の源泉は次の事情にある。すなわちフランスはあらゆる生活必需品を自国の多数の住民を養うためばかりか、それらに不足した人々にもその一部を分け与えることができるほどに豊富に産出すると同時に、同じ有利さをもたないため、フランスと必需品を交換するために何か享楽品や余分品を自国にみつけようと国中を隅々まで捜し回るような隣国に囲まれている、とういうことである」([1], pp. 582-583)。まえに述べたように、フランスでは通常の年度に自国民の必要消費量の1.5倍の小麦を生産することができる。ケネーもいう。「国外に販売してはるかに余りある量の小麦を生産できる王国にあって、その欠乏を恐れるあまり小麦の輸出を妨げるとすれば、フランスの利益を知らないことになろう」(Quesnay, “Fermiers”, dans I. N. E. D., *François Quesnay et la Physiocratie*, Paris, 1958, p. 448.)。穀物輸出の自由化を唱える論拠は両者ともまったく同じである。もっとも、このようなフランス農業の優位性に関する議論そのものはフランスに伝統的なものである。この点ではアイルランド生まれのカンティロンの議論はかれらとは異質である。就労人口の増加のために製造品の輸出による雇用機会の増大を重視するカンティロンにとって、農産物の輸出は自国民の消費にあてられるべき食糧とその生産のための土地を外国に譲り渡すに等しく、農産物は製造品輸出の見返りとしてむしろ輸入されるべきであった。議論の出発点がまったく異なっている(筆者の前掲論文を参照)。

(3) 小林昇「アダム・スミスにおける賃金」『小林昇経済学史著作集Ⅱ』未来社, 1976年, 87ページ。小林氏はこれに続けて, それゆえ「『国富論』には, 消費(市場)の縮小・投資機会の減少という問題意識はまったくふくまれていず, このことから, 経済循環における有効需要の分析という局面…は, この最大の古典からは脱落するに至ったのである」と述べておられる。